

平成 27 年 6 月 25 日

東京都立足立新田高等学校 教諭

黒岩公輔

私は都立足立新田高校でアームレスリング部（腕相撲）の顧問をさせていただいております。

全校生徒は 800 名。過去 3 年間で国公立大学に 4 名合格しております。卒業生の進路決定率は 99% で、ほとんどの生徒が進路を決定して卒業しております。関東大会以上の大会に進出している部活動は 4 つで、相撲部、男子バレー部、トランポリン部、陸上競技部。部活動加入率は 88% で、高校の中ではかなり高く、このことが本校の活力につながっています。卒業生のなかには日本一になって世界大会に出場し、アームレスリングの推薦で日本体育大学に入った生徒もいます。

去年の全国大会では、団体戦優勝を目標にしていたのですが、右、左ともに 4 位でした。優勝校は茨城県の磯原郷英高校という柔道部が強い高校です。

今年は、新入生に部員と一緒に作った新入生勧誘の V T R を見せたところ 6 人が入部しました。高校 2 年生が 3 人、新入生 6 人の計 9 人が相手では、さすがに顧問の腕がつったりすることがありますが、みんながんばっています。

ここで V T R 鑑賞 3 分間

「高校の特徴」

これからが本題ですが、高校というのは言うまでもなく義務教育の次にくるものです。中学校と高校の違うところは、高校に入ったあとの進路が多様であるということ。数字でいうと現在、大学への進学率は 50% を超えています。その他にも専門学校、就職という進路があります。また中学校と高校の違うところは、自分で進路先を決めていくところです。高校はその入口と出口に本人の自主性が現れるということに特徴があると思います。高校は自分の将来について他の誰かにあれこれと言われることなくても自然と「考える時期」になります。だからこそ、昨今言われているキャリア教育の最も重要な時期になるのではないかと感じています。

「高校生と向き合って」ということですが、東京都 23 区の場合、とりわけ義務教育では地域性が出てきます。地域性がどこに出てくるかというと家庭の事情です。母子家庭、父子家庭が一般的で、むしろ両親がそろっている家庭のほうが少ないというのが実態です。このような中で、私はどんな困難な環境にあっても一人ひとりの生徒にしっかりと向き合っていく。生徒一人一人は平等です。家庭が厳しいから、家庭が貧しいからということは一切関係なく生徒に接しています。先ほど名前は言いませんでしたが、部長の生徒ですが、彼は家庭環境が非常に厳しい子です。しかし、スポーツに対する気持ちやみんなを率いるというリーダーシップの気持ちが非常に強い。私は彼を何とか今年の 9 月の全国大会には日本一にさせてあげたいと思っています。

大事なことは、全て押しつけるのではなく、自分で考えて行動する力を引き出し、それを実現するための指導をするということです。これは授業だけではなく、部活、そしてすべての局面に対して言えるこ

とだと思えます。よく「教育とは？」と言われます。教育という字は教え育てると書きます。教師という言葉は一般的であっても育師という言葉はあまり聞かれませんが、今忘れられている大切なものがあるように感じています。「教える」というのは教師が一方的に知識をつめこむ場面が多いです。黒板に向かって黒板に対して授業をしている教員もいるというのも事実です。ここで、大事になってくるのは「育てる」という思考協働型です。生徒が主体的に考えて仲間とともに表現する。どちらが大事というより両方をどう組み合わせていくかです。「育てる」というだけでも部活動はうまくいかない。「教える」というのと「育てる」というのはどっちがどうというのではなく、orではなく and の発想をしていかなければいけないと思えます。

ここからは私自身の話になりますが、逆境から学んだものです。私が教職を希望した理由はたったひとつです。相撲を教えたかった。できれば母校の明大中野高校で亡くなった恩師の跡を継いで教えたかった。そのためには教師にならなければならない、というので大学を卒業したあと、父にお願いして大学院に行かせてもらって教員免許を取りました。しかし社会科の募集枠がなく、母校である明大中野中学校には行けなかった。たまたま受けた東京都から採用の返事をいただきました。そこは都立高校では相撲部が唯一ある、足立新田高校でした。しかし、結論から言えば指一本も相撲部には携わることができませんでした。専門の先生が既にいらっしまったので。そこでずいぶんと悩みました。相撲を教えることに人生を捧げてもいいと思っていましたから。

それまでは、やりたいことは何でもやらせてもらってきた。それができる環境にいました。自分が本当にやりたいことが出来ないのは、かなりきつかったです。初めての経験でした。そのとき私は、母校の恩師の言葉に救われました。「黒岩、確かにお前は今、相撲部には携われてはいない。けども、相撲で学んだ勉強と部活を両立することの大切さや目標に向かって諦めない、その精神を違うかたちで表現してやれ」と。

よくスポーツの言葉には「ONE FOR ALL ALL FOR ONE」という言葉があります。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」。私はこの言葉はスポーツだけの話かと思っておりましたが、実はそうではないことを知りました。職場で自分が困ったときに同僚に助けを求め、生徒に助けを求めようということも学んだ言葉です。どんなに興味のないこと、やりたくないことでも、その状況から学べることは必ずある。私自身、アームレスリング部と卓球部の顧問をやっていますが、スポーツにはそれぞれの魅力があってマイナスの部分だけではないと思えます。これまで当たり前と思っていたことは決して当たり前ではないんだということ。そして感謝することの大切さを学ばせていただきました。

私の一番好きな言葉、それは「JUST DO IT」という言葉です。「まずはやってみる」と訳しています。いやなこと、やりたくないことでもまずやってみて、そこから学ぶことがあるのだと。自分の逆境の中から本当の意味を学ばせてもらったと思っています。

最後になりますが、「善い教育者とは？」というテーマを日々考えているのですが、恥ずかしい話ですが、わかりません。わからないからこそ社会がどんなに変わろうと生徒と共にそれを追い求め続けられる人間でいたい。だからこそ結論を出さず、日々生徒と共に成長し続けるプロフェッショナルでいたいと思っています。